

骨壺

いちのみや(劇団かたかご)

登場人物

妻

夫

夏・和室。

蝉の声。

妻、机の上の小さな容器を眺めている。

夫、そこに通りがかり

夫 なにしてん

妻 なんでもええやん

夫 もう忘れえや

妻 いやや

夫 みててもしやあないやろ。

妻 これみてたらな、あの子の音がする気がすんねん。

夫 声？

妻 うん、こっから

夫 そーんなわけないて

座りながらガムを噛み出す夫

妻 くちやくちやうるさいわ

ガムを噛む音。

妻 聞こえへんやん、和也の声。

それでもガムを噛む夫

妻 怒るで

ようやく、ガムを噛む口をとめ、その場は静まるも、聞こえるのは蟬の声だけ

夫 …虫やん。

妻 あの子は虫ちゃう

夫 わかつとうわ

妻 なあ、ほんまになかったん？なんも

夫 しゃあないやろ、流されおってんから。

妻 なんでなん

夫 知らんわ。人間にはどうしようもない時もある。

妻 自然は強いねん。

妻 なんでうちの子なん。

夫 仕方ないって

妻 全部やん、全部しかたないやん。わたしらより先に和也が死ぬのも仕方ないん？

夫 ああ、そうや、人はいつか死ぬんや。

妻 なんでこんな早いねん。まだ二〇歳やってんで

夫 もっと早い人もいるて。

妻 和也、ほんまはもう二二歳やってんな。先月で。

夫 せやな…

妻 まだ信じられへん、死んだって。

夫 信じなあかんねん。もう一年以上経ってんねやで。

妻 …時がさ、止まったみたいやねん。あの子おらん

くなつてから。何してもさ、あの子のこと思い出

すねん。料理してても、魚好きやったなあとか、

なすび食べられへんかったなあとか。欲しいゲ

ム買ってやられへんで悪かったなあとか。

夫、再び口に含んでいたガムを噛み出す。

妻 和也も、ようガム噛んでたな：

夫 俺が教えてん。

夫、新しいガムを妻に差し出し、

夫 (おどけて) いる？

妻 いらんわ

夫、寂しそうに差し出したガムを引っ込める。

妻 なんていうかさ、和也の記憶の中にずっと閉じ込

められてるっていうか、忘れられへんっていうか、  
ずっとおんなじ時間過ごしてる気がすんねんな。

夫 ；んー、ガムてき、噛んでたら味無くなるやん。

なんか、そういうことやと思うねん、時間って。

おれらがなにしても、勝手に時間って過ぎてく  
ねん。そんで、みんないつか死ぬし、その記憶だ  
って薄れてくねん。

妻 信じたくない

夫 信じたくなくてもそうやねん。

妻 それでもさ、せめて、せめてやで、骨くらい残し  
てくれてもええやん：なんで骨までさらってくね  
ん。

夫 あの時だってみんなで必死にさがしたやん、村の

人みんなでき。けど浮き上らへんのやからしかた  
ないやん。

妻 ほら！せやったらさ、生きてるんとちゃう？どつ

かに流れ着いてさ。

夫 無理や。海やで。どこに流れ着くねん。

妻 どっかや

夫 どっかってどこや

妻 わからんけど、どっかや。

夫 無理やて…靴があっただけましやろ。

妻 靴やん

夫 和也の靴やで

妻 和也の靴やけど、和也は靴ちやう

夫 なんやねん、それ…

夫、ガムを噛み続ける

妻、虚ろな目で骨壺を手に取り、中を覗き込む。

妻 空っぽや…

ガムを噛む音

妻 なあ和也、声、聞かせてや

と、骨壺を耳に当てる

ガムを噛む音

妻 くちやくちやうるさいて。いつまで噛んでんねん。

沈黙。蝉の声が聞こえる。

夫 もう味せえへん

妻 だったら出しいや

夫 いやや。

妻 なんや

夫 味せえへんくなくても嚙んでおきたいねん。そういうことやろ、あんたの言うてるの…俺もやねん。

妻 和也はガムちゃう。

夫 おんなじや、みんな消えてくねん。残るのが骨か味のないガムの残りかってだけや。そんなでも名残惜しいもんやと思う。でも、いつか全部吐き出して乗り越えなあかんねん。

夫、ガムの残りかすを骨壺に向かって吐き出す。

妻 ちよつと、あんた、何すんの！？

夫 これで空じゃなくなった

妻 あほか、あんたのかすなんかいらんねん。いい加減にしいや、ほんまに。汚いやろ、ああもう、跡が残ったらどうすんねん。和也に顔向けできひんわ。

妻、骨壺からガムを取り出そうとする。

夫、それを制し、骨壺を取り上げる。

夫 ええやん、どうせなんも入ってへんかったんやからさ、和也のちやうやん。ただのツボやって。

夫、骨壺の口を妻の耳に当て、

夫 ほら、聞いてみ。なんも聞こえへんやろ。何が入ってもな、おんなじやねん。

妻、信じたくないように、骨壺を握る。

しかし、何も聞こえない。

夫、妻の手の上から自分の手を重ね握る。

夫 な、もう片付けろや

夫の目は、妻の目をしっかりと見ている。

しかし、妻は目を合わせずじっと骨壺に耳をすます。

夫、重ねていた手をさらに強く握る。

夫 なあ、片付けてや…

おわり